

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：33921

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02294

研究課題名(和文) 青少年向けメンタリング・プログラムの基礎理論と政策的妥当性の検証

研究課題名(英文) An examination of basic theories and validity of mentoring program as youth policy

研究代表者

渡邊 かよ子 (Watanabe, Kayoko)

愛知淑徳大学・文学部・教授

研究者番号：90220871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 青少年向けメンタリング・プログラムの政策的妥当性は以下から確認されている。プログラム評価：思慮深く実践されているプログラムは青少年の自己効力感や対人関係、学業成績等に有効に機能しうる。理論的妥当性：生涯発達の生態系の各レベルにおける社会科学理論がその有効性を基礎づけている。費用対効果：プログラムは高い社会的投資収益率を上げている。市民ボランティアの善意から起動しているメンタリング運動の陥穽を排除するため、参加者の倫理規範やネガティブな効果の除去や低減等、研究と実践の往還の強化が必要になっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

米国では百年以上の実践の歴史がある青少年向けメンタリング・プログラムが「先進」各国に拡大している。これらの西洋諸国とは異なる文化的社会的背景をもつ日本においてもメンタリング・プログラムが機能しうる。広島市での15年の実践とそのプログラム評価から実証することができた。メンタリング・プログラムは青少年の自己効力感や対人関係等によき効果を上げており、こうした成果は世代を超えた円環的生涯発達支援に関する社会科学の諸理論に基礎づけられ、社会的投資比率の視点からも有効な社会政策となっている。コロナ禍を経た今日、青少年向けメンタリング運動は北米を中心に新たな進化を遂げつつある。

研究成果の概要(英文)： Validity of youth mentoring program as a social policy is assured by the following three perspectives, program evaluation: well-managed mentoring program can raise youth's self-efficacy, inter-personal relationship, and academic ability, theoretical studies concerning mentoring: theories and insights of social science which are placed in various levels of ecology of human development provide theoretical foundations of mentoring, social return on investment: mentoring program is efficient from the perspective of cost and performance as a policy. In order to avoid the pitfall of mentoring program which is originated in the goodwill of participants, we need to examine not only the ethical problem but also the elimination of its negative effects, which leads to the enrichment of linking of theoretical research and practice.

研究分野：教育学

キーワード：メンタリング 青少年

1. 研究開始当初の背景

(1) メンタリングとメンタリング・プログラム

メンタリング(mentoring)とは、「成熟した年長者であるメンター(mentor)と、若年のメンティ(mentee、ないしはプロテジェ protégé)とが、基本的に一対一で、継続的定期的に交流し、適切な役割モデルの提示と信頼関係の構築を通じて、メンティの発達支援を目指す関係性」を意味する。メンタリングは日常的なインフォーマルなメンタリングと、人為的プログラムを介したフォーマルなメンタリングに大別され、メンタリング・プログラムは後者に属する。

メンタリング・プログラムは、参加者の募集、スクリーニング、マッチング、ガイダンス(傾聴スキル訓練等)、モニタリング、経験の共有、プログラム評価、から構成される。その特徴は、非専門職の普通の「素人」による支援であり、専門家による知識の囲い込みがないこと、基本的に報酬を伴わない市民ボランティアによる活動であること、関係性のモニタリングをプログラム事務局の専門家がを行い、各ペアの交流と関係性を支援していること、がある。メンタリング運動は、市民の善意とプログラム評価による成果の実証によって拡大を遂げてきた。メンタリング・プログラムは、「先進」各国で子どもの貧困対策や非行防止、学力向上、才能開花、移民や難民支援等の個別継続支援施策として導入されている。

(2) メンタリング運動の概況とメンタリング研究の到達点

世界のメンタリング運動を牽引している米国では、百年以上の伝統をもつ BBBS (Big Brother Big Sister)を中心に 4400 以上のメンタリング・プログラムが存在している。成人の3人に一人がフォーマル、インフォーマルを含めたメンタリングを行った経験があるといわれ、メンタリングは党派や人種を超えた広範な社会運動となっている。2005年のMENTORの調査によれば、メンタリング・プログラムに参加している大人は約300万人で1990年代の6倍となり、プログラムに参加していない4400万人の大人がメンターになることを真剣に考え、96%のメンターが他の人にメンターとなることを推奨している。メンタリング運動は、ヨーロッパ各国やカナダ、オーストラリア、ニュージーランド等で急速に普及拡大している。

メンタリング・プログラムが効果を生み出すメカニズムについては、生涯発達をめぐる生態学的システム論の視点から、ライフサイクル論、社会性・情緒・認知・アイデンティティの発達に関する諸理論、ライフ・コンヴォイや発達資産、社会関係資本等による理論的基礎付けが提示されるも、各理論の相互関連を含む体系的理論の検討は今後の課題となっている。

青少年向けメンタリング・プログラムの成果に関する研究レビューにより、周到な工夫がなされ思慮深く慎重に実践されているプログラムは、メンティの自尊感情、対人関係、学業成績、非行防止等に有効に機能することが確定される一方、2009年には一般的な学校型メンタリング・プログラムは殆ど効果がないとする調査結果が発表され、以後、メンタリング・プログラムをめぐる政策議論とメンタリング運動は、成果の実証に向けた新たな段階を迎えている。メンタリングに関する複数のハンドブックが出版改訂され、メンタリング・プログラムがもたらす経済効果の分析も試みられている。2014年の青少年のメンターの有無と必要性に関する初の全米調査では、深刻な問題を背負う青少年が切実にメンターを必要としていることが明らかになった。良質のメンタリング・プログラムとその政策的妥当性を基礎付ける理論的研究の必要性がますます高まっている。

国際的には1995年のBBBS研究以来、メタ分析を含む多様な研究の蓄積から、周到に配慮された良質のメンタリング・プログラムは非行防止や自尊感情の向上等の成果を上げていることが知られ、最善のプログラム実践に向けた知見が開発探究されている。一方、上記の経緯から2001年以来、研究代表者が青少年向けメンタリング・プログラムの研究を開始し、広島市青少年支援メンター制度が着実な成果を上げるも、日本国内においては青少年向けメンタリング・プログラムの研究も実践も広がっていない。こうした状況において、本研究はメンタリング運動が未成熟な日本においても、広島市の事例が示すようにメンタリングは有効に機能し、政策的妥当性をもつものであることを実証し、今後の日本におけるメンタリング運動の展開拡充に向けた学術的基盤を整備しておきたい。

2. 研究の目的

本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、生涯発達に必要なメンタリングを補完するメンタリング・プログラムが青少年施策として妥当であることを実証することである。メンタリング・プログラムがなぜ成果を上げるのか、いかにすればそうした成果が高まるのか、従来の生涯発達の生態系におけるマイクロレベルからマクロレベルに至る諸理論を体系的に俯瞰し、それらの相互関連を含めて精緻化すること、ならびにメンタリング・プログラムが費用対効果の面からも将来に向けた有効な投資であることを示すことで政策的妥当性を証明

したい。

本研究の目的は、人間の成長発達をめぐる生態系の保全に向け、自然発生的なメンタリングを補完するメンタリング・プログラムの基礎理論と政策的妥当性を検証し、日本におけるメンタリング運動の活性化を目指すことにある。本研究の独自性は、教育や次世代育成に関連する多分野の理論に基礎づけられた実践性と、プログラム評価による成果の検証にある。今日世界各地で興隆しているメンタリング運動そのものは、個々の青少年の実際的必要に応じて実践的に構築されてきたものであるが、メンタリング・プログラムは、心理学的知見（ライフサイクル論、レジリエンス、アタッチメント、重要な他者、役割モデル、社会的学習等）、社会学的知見（社会統制論、社会関係資本論等）、教育学的知見（生涯学習論、正統的周辺参加論、「発達最近接領域」等）によって基礎付けられている。これらの理論的知見を相互連関的に体系的に精緻化しつつ、社会科学的に確立されたプログラム評価によってその短期的・中長期的成果を検証することで、メンタリング・プログラムという青少年施策の科学的基盤を提供することが本研究の目的である。

本研究が目指すメンタリング研究は、青少年問題を分析・解釈するだけで冷笑放置するのではなく、実際のプログラムを起動することでその有効性の検証と理論構築によって政策的妥当性の実証を試みる実践的なものである。こうした理論と実践の相互往還が本研究の独自性であり、その成果としてメンタリング運動が未成熟な日本において喫緊に必要とされる子どもの貧困対策や非行防止、学力向上、自尊感情の向上等の青少年支援施策の一環として役立つものとなろう。最適なメンタリング・プログラムの提案は、従来の教育学研究にはない創造的なものである。特に、米国を中心とする西洋の社会的文化的背景において育まれてきたメンタリングに関する知見の普遍的妥当性を日本という非西洋の異文化の視点から検討し、日本社会に適合したメンタリング運動の成長促進に向けた理論的実践的知見を提示することは、人間の成長発達をめぐる生態系の保全に向けた総合科学的基盤整備に繋がる革新的な成果として期待される。

3. 研究の方法

本研究は青少年向けメンタリング・プログラムの政策的妥当性を検証するため、以下の3方向からアプローチしていく。

第1は、日本における先駆的メンタリング・プログラムである「広島市青少年支援メンター制度」の成果と有効性に関する中長期的プログラム評価を実施する。日本で未成熟なメンタリング運動がなぜ広島において花開いたのか、15年の実践と成果をプログラムに参加しているメンターとメンティ、保護者への定量的・定性的調査を実施する。定量的評価については、すでに3回実施している年度末の質問紙調査から得られた多変量データを、項目反応理論、階層的重回帰分析、多変量時系列分析、構造方程式モデリング、などの統計的手法を用いて解析し、これまでの15年間に及ぶ当該メンタリング・プログラムが、どのように生成・発展して来たのかを統計学的に明らかにする。定性的評価については、すでに実施している初期3年間の報告書分析の結果をふまえ、15年間の交流ペアのうち交流期間の長短と交流頻度、メンターの年齢と性別を類型化しながら、交流に関するメンターとメンティ、保護者による報告書の分析を行い、メンタリングが3者に何をもたらしているのか分析する。また、こうした変化について3者への面接を行い、各々の参加動機とメンタリング・プログラムへの期待が実現されたのかどうか、メンタリングと他のボランティア活動との違いについても聞き取り調査を行う。

第2は、円環的生涯発達支援としてのメンタリングに関する理論的精緻化である。既にメンタリングに関する主要な理論の生涯発達の生態系のレベルごとの並列的整理は行っているが、これらの理論が生涯発達の各段階においていかに時系列的に相互関連しているのか、多様な理論の体系的精緻化を行う。またこれまでピア・メンタリング・プログラム以外では特に検討されてこなかったコフォートの自己心理学の理論やそこから示唆される共感、プログラム参加者の道徳性の発達理論等も組み入れ、生涯発達の各段階において変化する発達促進のエージェントとメンタリングの連関がどのようなメカニズムで機能するのか、円環的生涯発達支援に関する包括的体系的な理論的検討を行う。

第3は、新たに発表された米国やカナダのメンタリング・プログラムの現状に関する全国調査や「全米メンタリング月間」キャンペーン、Chronicle of Evidence-Based Mentoringの内容分析による米国のメンタリング運動の動向分析を中心に、財政逼迫状態にある各国のメンタリング運動の実態分析と政策動向に関する文献資料調査を継続的に実施する。特にメンタリング・プログラムの費用対効果に着目した将来への投資の視点からのメンタリング・プログラムの政策的妥当性について検討する。これらの結果と広島市青少年支援メンター制度の実績とを比較しつつ、青少年向けメンタリング・プログラムの円環的生涯発達支援施策としての妥当性を検証する。

上記3アプローチから得られた結果から、日本において最適に機能する青少年向けメンタリング・プログラムの実践を科学的に基礎づけ、メンタリング運動の成熟に向けた政策提言を行う。

4. 研究成果

研究成果として以下の9編の研究論文を公表した。

(1)「青少年向けメンタリング・プログラムの政策的妥当性に関する考察 北米における貧困

の世代間連鎖の阻止に向けた社会的投資収益率の視点から」(単著)2019年3月『愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇』第9号、51 - 61頁。

(2)「米国の青少年向けメンタリング運動の動向：MENTOR による三つの報告書(2014~2018)の検討から」(単著)2019年3月『愛知淑徳大学論集 文学部篇』第44号、125 - 142頁。

(3)「批判的メンタリングに関する序論的考察」(単著)2020年3月『愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇』第10号、67 - 77頁。

(4)「青少年向けメンタリング運動の生成と IHAD プログラム」(単著)2020年3月『愛知淑徳大学論集 文学部篇』第45号、93 - 105頁。

(5)「メンタリングが及ぼすネガティブな効果に関する知見の検討」(単著)2020年11月『日本生涯教育学会論集』41、3 - 12頁。

(6)「米国のコロナ禍における青少年向けメンタリング運動の展開」(単著)2021年9月『日本生涯教育学会論集』42、3 - 12頁。

(7)「青少年向けメンタリング・プログラムにおける倫理規範に関する序論的考察」(単著)2022年3月『愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇』第12号、35 - 45頁。

(8)「カナダの2020年前後の青少年向けメンタリング運動に関する考察」(単著)2023年3月『愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇』第13号、33 - 44頁。

(9)「批判的メンタリングと米国の青少年向けメンタリング運動の革新に関する考察」(単著)2023年3月『学び舎 教職課程研究』(愛知淑徳大学教育学会)第18号、99 - 108頁。

加えて、以下の6本の口頭での学会発表を行った。

(10)「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価」(単)2018年10月6日(名桜大学)『日本社会教育学会第65回研究大会プログラム要旨集』100 - 101頁。

(11) Longitudinal Evaluation of Eclectic Youth Mentoring Program Implemented in Hiroshima, Japan, WERA (World Education Research Association) Focal Meeting in Tokyo, 10th Anniversary, August 6, 2019, Gakushuin University, (Naotaka Watanabe との共同発表), Conference Program, p.41.

(12)「Critical Mentoring に関する考察」(単)2019年9月14日(早稲田大学)『日本社会教育学会第66回研究大会プログラム要旨集』45頁。

(13)「メンタリングが及ぼすネガティブな効果に関する考察」(単)2019年12月1日(国立教育政策研究所社会教育実践研究センター)『日本生涯教育学会第40回大会発表要旨集録』36頁。

(14) Does Western-born Youth Mentoring Programme Function in Different Culture? : Exploring its Adaptability to Japan (I) (II), 8th Biennial International Conference of Community Psychology (ICCP), November 11-13, 2020, Victoria University, Melbourne: Australia, (オンライン開催、Naotaka Watanabe, Hironori Imai との共同発表)。

(15)「米国におけるコロナ禍の青少年向けメンタリング運動の展開」(単)2020年11月14日(国立教育政策研究所、オンライン開催)『日本生涯教育学会第41回大会発表要旨集録』16頁。

また学会以外で行った講演や研究発表については以下のとおりである。

(16)「メンター制度の成果と可能性」2018年12月2日、広島市子ども未来局主催、広島市青少年支援メンター第2回定期研修会講演(広島市総合福祉センター)

(17)「メンタリング理論とその日本への適用可能性」2019年2月27日、子どもの貧困研究のフロンティア定例学術研究会<第10回>での発表、(首都大学東京オープンユニバーシティ飯田橋キャンパス)

(18)「Mentoring cultivates youths」2022年9月、*Impact: The Power of Knowledge* (Science Impact), pp. 23-25. (www.impact.pub)

上記以外のその他の論稿として以下がある。

(19)「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価」『地域ケアリング』(北隆館)第21巻10号、2019年9月、62 - 65頁。

(20) 渡辺かよ子・渡辺直登・今井裕紀「青少年メンター制度：15年の成果の概要」(広島市子ども未来局子ども・家庭支援課『メンターだより』181号別添資料2020年3月31日、1 - 4頁。

(21)「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価」『地域ケアリング』(北隆館)第22巻7号2020年7月、86 - 89頁。(編集者の依頼により「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価」『地域ケアリング』(北隆館)第21巻10号2019年9月62 - 65頁を再掲)

(22)「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と課題」『地域ケアリング』(北隆館)第23巻3号2021年3月、81 - 84頁。(編集者の依頼により「青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価」『地域ケアリング』(北隆館)第22巻7号2020年7月86 - 89頁に加筆再掲)

総じて、大変残念であるが、種々の要因が重なり、上述の研究計画を十全に実施することができたとはいえない。特に2020年度以来のコロナ禍の下、当初計画していた資料調査に出かけることができず、例年参加者との交流から多くを学ばせていただいていた広島市青少年支援メンター制度のメンター研修会も中止となった。加えて研究代表者の二度の入院を含む2年間の闘病により、研究を行いその成果を発表する体力そのものが不足した。

乏しいながらも本研究の成果を当初の研究方法のアプローチ別に分類すると以下ようになる。第1の広島市メンター制度のプログラム評価については、(10)(11)(14)(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22)等である。これらは後述の各国のメンタリング運動の成果と動向分析をふまえながら、広島市での青少年向けメンタリング・プログラムがどのような成果を上げてきた

のか、これまで実施した2回のプログラム評価と同様、子ども(メンティ/プロテジェ)・メンター・保護者の三者に従来と同一の質問項目と尺度を用いた定量的分析を行った。そして15年間で今回を含む3回のプログラム評価の結果から、メンタリング・プログラムは着実に成長しており、参加者はメンタリング・プログラムに参加することから深い喜びを得ていることが判明した。それぞれの参加者のプログラムへの評価の変化、例えば保護者がプログラムへの期待が上がるほど評価が低減し、子ども(メンティ/プロテジェ)のメンタリングによる変化を保護者は子ども本人ほど評価していない等、解釈を要する複雑な面も見られるが、プログラムへの参加そのものへの満足度は3者とも一貫して高い。年に数回発行される「メンターだより」に記されたメンターや子ども(メンティ/プロテジェ)、保護者の活動報告には、相互に他者を思いやる温かい感謝の念が表明されている。広島市の青少年向けメンタリング・プログラムの15年間の実践は確実に成果を上げ、日本においてもメンタリング・プログラムが有効に機能することを実証している。

第2の円環的生涯発達支援としてのメンタリングに関する理論的精緻化については、直接的には(17)以外、殆ど進展がなかったが、関連する成果としては(1)(3)(5)(7)(9)(12)(13)等がある。ここでは子どもの貧困への対応という視点からメンタリング・プログラムの成果を問い、特に従来の現状適応のためのスキルの伝授を主な目標とするメンタリングに対する抜本的問い直しとして、批判的人種理論に基づく批判的メンタリングの理論を検討した。批判的メンタリングは単なる社会適応ではなく、社会そのものの変革を視野に入れた異世代が支え合う市民運動に転換しつつある新しいメンタリング運動と捉えることができ、こうした社会変革と繋がったメンタリングは青少年の精神健康や心的安寧に貢献していることが特筆される。またメンタリング・プログラムで生じ得るネガティブな効果の分析とそれをいかに予防し低減させるかの工夫、さらにメンタリング・プログラムが機能する力の源泉となっている参加の善意と倫理規範をめぐる課題を検討した。

第3の各国のメンタリング運動の動向分析については、米国のMENTOR(National Mentoring Partnership)によるメンター、メンティ、メンタリング・プログラムの現状に関する包括的調査報告書の分析とメンタリング運動の新たな動向を検討し、その成果は(1)(2)(3)(4)(6)(8)(9)(12)(15)等である。米国にあっては、困難を抱えている青少年ほど切実にメンターを必要としていることが判明し、メンタリング・プログラムの普及によって今日の青少年は年長世代よりもメンターと出会う機会が増え、またこうした青少年向けメンタリング・プログラムの拡充の必要性とそのための税金投入は広範に支持されていることが調査結果から判明している。こうした米国でのメンタリング・プログラムの普及に貢献し、今日のメンタリング・プログラムの原型となったユージン・ラングの「I Have a Dream」プログラムの生成を分析し、またコロナ禍の下での米国ならびにカナダの青少年向けメンタリング・プログラムの動向を検討した。カナダにあっては米国での研究成果を精査しながら、青少年の精神健康と心身の発達に必須のメンタリングという確信に基づき、自国のメンタリング運動の現状分析と運動をいかに拡充させていくか、実践的工夫と議論を継続している。

以上、本研究の成果をまとめると、広島市での青少年向けメンタリング・プログラムの15年にわたる実践の成果より、非西洋の日本の社会文化においても青少年向けメンタリング運動は根付き、有効に機能していることが判明した。こうした日本におけるメンタリング運動の萌芽を育み拡張していくためには、世代を超えた善意が還流する円環的生涯発達としてのメンタリングの基礎理論の精緻化、特に精神健康と社会変革が結びついた理論構築が必要であり、各国のメンタリング運動の動向を学び続け、実践智を共有しつつ、理論研究と実践の往還の強化に留意することが特に肝要となっている。総じて、米国やカナダ等の「先進」各国の研究成果や動向から、社会科学から導かれる理論から、広島での15年間の実践とそのプログラム評価から、青少年向けメンタリング・プログラムは日本においても政策的妥当性を持ちうるものである。本研究の成果が日本の青少年向けメンタリング運動の活性化につながることを切に願う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 13
2. 論文標題 カナダの2020年前後の青少年向けメンタリング運動に関する考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 18
2. 論文標題 批判的メンタリングと米国の青少年向けメンタリング運動の革新に関する考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学び舎 教職課程研究	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 42
2. 論文標題 米国のコロナ禍における青少年向けメンタリング運動の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本生涯教育学会論集	6. 最初と最後の頁 3 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 12
2. 論文標題 青少年向けメンタリング・プログラムにおける倫理規範に関する序論的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 41
2. 論文標題 メンタリングが及ぼすネガティブな効果に関する知見の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本生涯教育学会論集	6. 最初と最後の頁 3 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe, N. and Sano, T.	4. 巻 5
2. 論文標題 Mentoring Program for Training of Professionals: A Case of Graduate School of Engineering Research	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Bulletin of Aichi Shukutoku University, Faculty of Global Communication No. 5	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 21 - 10
2. 論文標題 青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 62 - 65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 10
2. 論文標題 批判的メンタリングに関する序論的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇	6. 最初と最後の頁 67 - 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 45
2. 論文標題 青少年向けメンタリング運動の生成とIHADプログラム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 93 - 105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子・渡辺直登・今井裕紀	4. 巻 181 (別添)
2. 論文標題 青少年メンター制度：15年の成果の概要	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 メンターだより (広島市子ども未来局子ども・家庭支援課)	6. 最初と最後の頁 1 - 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 9
2. 論文標題 青少年向けメンタリング・プログラムの政策的妥当性に関する考察 北米における貧困の世代間連鎖の阻止に向けた社会的投資収益率の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇	6. 最初と最後の頁 51 - 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺かよ子	4. 巻 44
2. 論文標題 米国の青少年向けメンタリング運動の動向：MENTORによる三つの報告書 (2014～2018) の検討から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 125 - 142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Watanabe, N., Watanabe, K., Imai, H.
2. 発表標題 Does Western-born Youth Mentoring Programme Function in Different Culture? : Exploring its Adaptability to Japan (I) (II)
3. 学会等名 8th Biennial International Conference of Community Psychology (ICCP) (November 11-13, 2020, Victoria University, Melbourne, Australia, Online) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡辺かよ子
2. 発表標題 米国におけるコロナ禍の青少年向けメンタリング運動の展開
3. 学会等名 日本生涯教育学会第41回大会（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、東京 / 11月14日 / オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Watanabe, N. & Watanabe, K.
2. 発表標題 Longitudinal Evaluation of Eclectic Youth Mentoring Program Implemented in Hiroshima, Japan
3. 学会等名 WERA (World Education Research Association) Focal Meeting in Tokyo, 10th Anniversary, August 6, 2019, Gakushuin University, Tokyo, Japan (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺かよ子
2. 発表標題 Critical Mentoringに関する考察
3. 学会等名 日本社会教育学会第66回研究大会（早稲田大学 / 9月14日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺かよ子
2. 発表標題 メンタリングが及ぼすネガティブな効果に関する考察
3. 学会等名 日本生涯教育学会第40回大会（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター / 12月1日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺かよ子
2. 発表標題 青少年向けメンタリング・プログラムの成果と評価
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回研究大会（名桜大学 / 10月6日）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡辺かよ子
2. 発表標題 メンタリング理論とその日本への適用可能性
3. 学会等名 子どもの貧困研究のフロンティア定例学術研究会 < 第10回 >（首都大学東京オープンユニバーシティ飯田橋キャンパス / 2月27日）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	渡辺 直登 (Watanabe Naotaka) (90175109)	愛知淑徳大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授 (33921)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	今井 裕紀 (Imai Hironori) (20866529)	新潟国際情報大学・経営情報学部・講師 (33107)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関